36 号　2020 年 8 月 15 日発行

SIGNIS　JAPAN　ニュースレター

タリタ・クム！　起きなさい！

発行：SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）
代表：土屋 至
発行所：〒107-0052　東京都港区赤坂 8-12-42
聖パウロ女子修道会内
TEL 03-3479-3941 E-mail：info@signis-japan.org
http://signis-japan/org/

聖母被昇天をお祝いいたします。

新型コロナウイルスの感染拡大が収まらない中、聖母被昇天の祝日 8 月 15 日、日本は終戦 75 年の節目の年を迎えました。今、戦争とは別の形で、目に見えないウイルスによって、私たちの日常生活が脅かされています。全世界が同時に体験しているこの苦難は、戦争と同じように、私たちがお互いを尊重し、協力し合うことでしか解決しえないことを、身をもって知るようになりました。

地球上のすべての被造物が健やかに生きることのできる、平和な世界が実現されますよう、聖母に祈りたいと思います。

日本カトリック映画賞　授賞式＆対談

第 44 回日本カトリック映画賞の授賞式と対談が 7 月 4 日にカトリック浅草教会にて異例のかたちで行われました。例年は、なかの ZERO ホールなどの会場で約千名の観客を迎え授賞式と上映会、そして授賞作の監督と晴佐久昌英神父（シグニスジャパン顧問司祭）の対談を行っていましたが、今回は新型コロナウイルスの影響で中止となりました。去る 1 月に、授賞作品として『こどもしょくどう』（日向寺（ひゅうがじ）太郎監督・パル企画製作配給）が決定、チラシの印刷も終わっていた段階での中止はつらい決定でした。『こどもしょくどう』は、“子ども食堂”が必要とされる現代社会を子どもの視点から描いた劇映画です。この作品を愛してやまないシグニスジャパンの私たちは、一人でも多くの方にこの作品の存在と魅力を知っていただきたいという思いから、上映会ができなくても、授賞式と対談だけは無観客で行い、それをビデオ記録し、web 配信することで意見が一致しました。

左より
晴佐久神父、日向寺監督、土屋会長

当日は、午後 1 時半から浅草教会の聖堂で関係者のみで授賞式が行われました。シグニスジャパン土屋至会長の挨拶に引き続き、晴佐久神父から授賞理由が述べられました。主人公ユウトが貧しく食事ができない姉妹と出会い、我が家の食卓から自分の“カツ”をこっそり届ける場面を挙げて、「…大人は普通やらない。でも、子どもは神の国の住人でもありますから、迷いながらも実際に動く」と、この映画の感動の一端を語りました。賞状、トロフィー、花束を受け取られた日向寺監督は、受賞にあたり「（上映会が中止になったことを）当初はとても残念に思っておりました。しかし、人と人を分断するコロナと、人と人のつながりに可能性を見出そうとするこの映画が同じ年にあるというのも、何かのめぐり合わせだろうと今は考えるようになりました」と、その思いを語りました。その後、会場を同教会エントランスホールに移し、日向寺監督と晴佐久神父の『こどもしょくどう』をめぐっての対談となりました。この映画の制作のいきさつをはじめ、実際の“子ども食堂”との出会い、なぜ大人ではなく子どもの目線で描こうとしたのか、そして日向寺監督の人間観にまで話が及びました。晴佐久神父は映画を観ながら「善きサマリア人のたとえ」（新約聖書ルカによる福音書 10 章 25-37）を思いましたと語り、誰かの助けがないと生きていくことができない人たちがたくさんいること、そしてそういう人たちに関わりたいけれど、それができない現実が私たちの中にあることを指摘しました。みんながどうしたものかと言っている時に、そこから一歩踏み出していく世界を、今このコロナの時代にみんなが求めている。この映画を観て、自分も一歩踏み出す勇気を持っていただいたら、この映画賞はすごく大きな役割を果たすのではないかと強調されました。対談の最後は日向寺監督がこれからも素晴らしい作品を撮ってくださるように参加者全員でお祈りを捧げました。「映画はこの世界をよいものに変えていく力を秘めている」授賞式における晴佐久神父のこの言葉が一同の胸に刻まれた瞬間でした。

（鈴木 浩　映画チーム）

★この授賞式と対談は以下の URL で視聴できます。You Tube　https://youtu.be/iLAiWHTsM6c

★『こどもしょくどう』は DVD 販売中です。　公式サイト　https://kodomoshokudo.pal-ep.com/

「子どもたちのためのオンライン教会学校」を通して

片岡　義博（名古屋教区司祭）/ 富山地区共同宣教司牧担当

現在、私は名古屋教区の富山県内にある４つの小教区を、フランシスコ修道会の神父様方と共同宣教司牧しております。

今般の新型コロナウイルス感染対策の教区の方針により、富山地区も３月８日から５月３１日まで、信徒が集まってのミサおよび集会を中止せざるを得ませんでした。そこで、その期間中、少しでも主との一致を体験し、霊的聖体拝領の助けになればと、富山地区の信徒のために、You Tube を通しての主日ミサの動画配信を毎週おこなってきました。

雨晴海岸にて

「オンライン教会学校」配信のきっかけ

主日ミサの動画配信が長期化する中で、ある日、関東に住む家庭をもつ友人から、「聖歌をお家で元気に歌えるような『子どもたちのためのミサ』をやってほしい」というリクエストがありました。ミサにも与れず、お友だちに会うことも我慢してステイホームする子どもたちに、なんとかして、主の日やミサを、大切にしつづけてもらいたいという気持ちは痛いほど伝わってきました。

その友人の声を受けて可能性を探る中で、私が第一に感じたことは、歌を入れたりしてミサを捧げると、どうしても小１時間の動画になってしまう。どうしたら、子どもたちが集中できる、よい番組になるだろうかということでした。

たまたま、時を同じくして、今年の４月から、私はオリエンス宗教研究所発行の「週刊こじか」で子ども向けの福音解説のお仕事をいただき、連載がはじまったところでした。それで、そのメッセージを動画に活用できないかと思い、オリエンス編集部にご相談させていただいたところ、執筆者本人がその内容を紹介することは問題ないと了承をいただくことができました。こうして、子ども向けの福音解説をメインとした、今回の「オンライン教会学校」の配信が始まりました。

動画内容

番組構成は、「主日の福音朗読」と「福音メッセージ（こじかの福音解説）」に続いて、毎回「聖歌」を１曲紹介しました。子どもたちが御言葉を味わったあとに、元気に聖歌を歌って、神さまに賛美と感謝を捧げられるように、当初の友人のリクエストも応える形で構成しました。

聖歌は、子どもミサや青年たちの集まりで良く歌う曲の中から、主日の福音やメッセージにできるだけ沿うものを選曲し、演奏は担当する富山地区の青年たちが快く協力してくれました。開設当初は、ギター、バイオリン、キーボードという少人数から始めたバンドには、緊急事態宣言解除後から、ドラムやフルート、ボーカルメンバーも加わり、青年たちも楽しんで演奏してくれました。

また、動画制作を重ねるうちに私自身も少しずつ編集作業に慣れ、当初、撮影場所としていた富山教会の一室を飛び出して、富山地区の小教区を紹介しながらお届けしたり、後半は、少し遊び心も取り入れながら富山県の観光名所をいくつか訪れ撮影をおこないました。そのせいか、子どもだけでなく、おおくの大人の方々にも閲覧していただけた様子でありがたかったです。

音楽（聖歌）配信に関して

今回の動画の配信作業で、私が特に気をつけたことは、著作権の問題でした。今回のように、音楽（聖歌）を含む配信では、作詞作曲者に、動画配信の承諾を取る必要がありました。

基本 You Tube は、JASRAC（日本音楽著作権協会）と許諾契約を締結しているので、JASRAC 管理楽曲を動画配信すること自体は問題ないようですが、今回お届けしたものを含め、こういった類の聖歌は、ほとんど JASRAC 管理外の曲ばかりですので、念のため個別に作詞・作曲者の承諾を得るよう努めました。（但し、「友よ歌おう」（太平洋放送協会編）に収録されている楽曲は、書類申請（有料）をおこない、動画に許諾番号を記載しました。）

ミサの配信を含め、この辺りの著作権の情報が共有されることも大切なことと感じました。

大きな反響の中で

配信をはじめて、たくさんの励ましのお手紙やメールをいただきました。全国的にミサに集まることができない状況で、教会学校の先生やリーダー方も、子どもたちのために何かできることがないかと、同じ悩みを持ち、模索されていた中で、今回の動画番組の需要は大きかったように感じました。

主日ミサが再開されたある小教区では、教会学校に集まった子どもたちと、プロジェクターを使ってスクリーン画面で、引き続き動画を見てくださったと聞いています。

同番組は、４月１９日から７月１９日までの３か月間（１４週）、毎週配信を続けましたが、「週刊こじか」が夏休み期間に入るタイミングで、一応ひと区切りをつけさせていただきました。

まだ感染終息には時間がかかる中で、継続のお声もたくさんいただいたのですが、私もコロナ禍で仕事に比較的余裕があった時期に始めた配信で、撮影から編集、配信まで１人でおこなっていたため、どうしても司牧の仕事が元に戻りつつある中で、時間を確保することが難しくなったことが、ひと区切りとした大きな理由です。

★オンライン教会学校　年間第 16 主日
https://youtu.be/Sb8GJOpWTyo

しかしながら、今回の友人の声をきっかけにはじめた、この子ども向けの動画配信は、アフターコロナの子どもたちへの信仰教育にとって、ソーシャルメディアが大切なアイテムになる可能性を示してくれました。

それは、特に地方の小さな小教区などで、子どもたちの養成に関わってくださる先生やリーダーの確保が難しい状況でも、こうした動画配信を通して信仰教育のエッセンスを共有できれば、家庭や共同体での信仰教育の大きな一助になるのではないかということです。社会の大きな変化の中にあっても信仰を育んでいこうとする方々と思いをひとつに、これからも情報共有をしながら、新たな福音宣教の歩みを進めていけることを願っています。

礼拝の裾野が広がっている……
インターネットによるミサ配信に思う

石井 祥裕
(AMOR 編集部/
SIGNIS JAPAN インターネットチーム)

SIGNIS JAPAN 関連活動であるウェブマガジン《ＡＭＯＲ－陽だまりの丘》の編集を担当しています。このマガジンで創刊以来「ミサはなかなか面白い」という対話編を今年の４月初めまで３年半連載してきました。終盤が新型コロナウイルス感染拡大防止のための緊急事態宣言の時期と重なったことは示唆的でした。礼拝論を専攻する身として、今この状況下での典礼の意義についてどう考えるかを問われることは当然のことと受けとめています。まだあまりまとまらないのですが、幾つかの点を記してみたいと思います。

５月１日に発行された『東京教区ニュース』372 号で菊地功大司教が「典礼の映像配信の裏側」という記事を寄せています。３月１日から開始された司教座聖堂関口教会でのミサ配信がどのような苦心の産物であるか明らかにしているもので、中でも興味深かったのは、配信に携わっている関口教会の信徒の方が「以前から配信の可能性を検討してくれていた」と述べられていることです。たしかに、なによりも記憶に新しい昨年の教皇訪日ミサが最近のミサ配信システムの鮮やかな成果でした。参加できなかった人、遠隔地の人への伝達が有効に実施された最良の実例だったでしょう。それらの経験をも糧に、今、ミサに対して、“一定の仕方で”だれもが“参加できる公開方法”としてフル稼働されています。

このようなミサ配信が単なる対症療法にとどまらず、ウィズコロナ時代の恒常的方式となっていく懸念と可能性があります。信徒の典礼への積極的行動的参加とは、20 世紀初頭以来、教会を突き動かしてきた大きなテーマでした。それを可能にし、さらに促進するために形づくられているのが第２バチカン公会議後刷新された今の典礼です。現行のミサの式次第・典礼暦・聖書朗読配分がスタートしてからちょうど 50 年である 2020 年。目下の状況は典礼と教会のあり方を根底から考え直させる大きな引き金となっています。

配信ミサは、同時的に視聴するならミサへの直接参加の代替方式という意味をもちますが、タイムシフトで各人が視聴する場合には、ある意味で“会衆用ミサ典礼書の映像音声版”という姿に見えてきます。「聖書と典礼」や「毎日のミサ」を手にして個人的に黙読や音読をとおして祈る努力をするのと並ぶような個人的礼拝を支える手段だということです。

さらに、現在多方面で普及しているオンライン会議の経験が一歩進んで、新しいタイプの礼拝形態、すなわちオンライン型の「みことばの礼拝」（朗読・説教・祈願・歌によって構成されるもの）が提案されてくる予感がします。実は、現代の典礼神学は、ミサ中心の典礼生活だけではなく、聖書朗読（みことば）を中心とした祭儀をさまざまな形で提案しています。「神のことばの祭儀」や信徒も参加して行う朝・晩の祈りの奨励がそうです。

このような、ことばの典礼型の祭儀のニーズが強く感じられているのが“司祭不在”の場合ですが、今求められているのは“会衆不在”の場合の新たな形といえるかもしれません。しかしそれは、“会衆が（聖堂には）不在でありつつ（ネット上で）臨在している場合”という未曾有の共同性の現実に応じるべきものです。

ミサ＝感謝の祭儀、すなわち聖体の秘跡の祭儀に神学的核心には、人格的にそして身体的にも、神から与えられる恵みを実際に受け取るという交わりの形があることはもちろんです。しかし、それはあたかも富士山の頂のもつ崇高な美しさのようなもので、その素晴らしさは、実際は裾野の広大さと 360 度全角度から見ての山姿の多様性に支えられています。

今の状況が問いかけているのは、一人ひとりの礼拝への自発性と、霊的な礼拝の裾野を広げていく工夫と情熱ではないでしょうか。非公開・限定公開でもミサがささげられている事実が常に伝えられることはやはり大切で、それが個々人の意識の深化と新たな工夫の喚起につながることか願われます。

（典礼神学者/上智大学非常勤講師）

オンライン・ミーティング

“Zoom”という言葉を聞いた。そして最初の体験は今年3月初めSIGNIS Asiaの役員会だった。（写真右）すぐにその有用性を外出自粛で会議のできない日本でも活用したいと、まずは 3/15 テストし、3/16のシグニス定例会は、浅草教会に集まった者10名＋Zoom参加者3名で、これならやれるとの実感を得た。各人の表情もわかって安心なので、４月からは全面的に Zoom ミーティングに移行し、５月のシグニスジャパンの総会は Zoom で全く問題なく開催できた。画面共有で資料の説明も可能だし、議論も活発にできる。

シグニスの国内外の色々な催しが中止になったり、延期になる中、インドで開催のオンライン・メディア教育セミナーに日本から青年がひとり参加でき、とても充実して楽しいセミナーだったと感激していたのも嬉しい。（写真下）

メディア教育のオンラインコース
First ever Media Education Online Course in India
(2020年7月17日～31日)
主催 NISCORT（National Institute of Social Communications, Research and Training : インド・コミュニケーション研究訓練大学）
http://www.signisasia.net/first-ever-media-education-online-course-in-india/

所属教会の部会でもZoom会議、プロテスタントの5回シリーズの「動画による伝道」セミナー（※下に案内）もあり、個人の語学レッスンもZoomで受講等、全く違和感がない。却って移動時間、交通費等を考えると、3密回避に加え、身体にも金銭的にも負担が少なくて快適と思える様になった。国際会議も同様だ。そうは言っても、やはり直接会って握手したり、肩を叩いたり、ハグしたりの感触とか「ぬくもり」とか、休憩時間のネットワーキングは捨てがたい。ウィズ／ウィズアウト・コロナに拘わらず、シグニスジャパンもオンラインのセミナーやイベントの他、アジア各国シグニスの様な Zoom や YouTube の積極的な活用を真剣に推し進めたいと思う。

早くコロナが収束して、オフライン会議とオンライン会議のよいバランスが取れる環境となることを祈って。

（町田雅昭　事務局長）

スマホでできる動画伝道ワークショップ（3）
「教会の物語を魅力的にするナレーション術」

日　程：2020年9月19日（土）
※定員15名+オンライン
ゲスト：晴佐久昌英神父
（カトリック上野教会 主任司祭）

主　催: 片岡賢蔵氏
（動画伝道ワークショップ主宰/
東京神学大学大学院2年 /
日本基督教団 鎌倉泉水教会員）
協力　SIGNIS JAPAN カトリックメディア協議会

★申込み必要　詳細は下記キリスト新聞社HPで
https://www.christianpress.jp/44329-3/

賛助会員募集

ご一緒にメディアを通して福音を伝えていきましょう！

わたしたちSIGNIS JAPANの活動をサポートして下さる賛助会員を募集しています。
会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム！」（年3回発行）をメールまたは郵便にてお届けする他、賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で行っています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。
年会費 3,000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせ下さい。
どうぞよろしくお願いいたします！

〒107-0052　東京都港区赤坂8-12-42　聖パウロ女子修道会内　SIGNIS JAPAN / info@signis-japan.org
会費およびご寄付は、下記へ振込みをお願いいたします。
郵便振替　口座番号　00100-0-594547　口座名称　SIGNIS JAPAN　代表者　土屋　至